

傘とお玉とスケッチブックと水泳をするには向いていないドレス

レッド！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今作品は、4月1日のエイプリルフル企画として書かれましたが、今後もシリーズ展開していく予定です。

目次

ひまりトークング 其の壱

1

ひまりトーキング 其の壱

001

えーと、こんにちは。

少しだけお話しても良いですかね？

わたしの名前は玉上 陽毬、今回の語り部を務めさせて頂きます。
両親が経営している和食店での話。

というのも、わたしは小学生の頃からお料理って得意でした。

両親の職業も影響していますが、何よりも食べてもらって美味し
いって言って貰えるのはとても嬉しいですからね。

最初に作ったのは卵焼きで……って危ない危ない。

話が逸れてしまいましたね。

こほん。

今からわたしが話すのは、わたしが中学三年生の時の夏休みのある
日にあるお客さんから聞いたある噂についての話です。

せいっぱい頑張るのでぜひ聞いてくださいね。

002

受験生でありながらわたしは今、お店で接客に当たっています。

まあ、わたしが好きでやってるのでおとうさんもおかあさんも咎め
ないですが、出来て夏休み中ってトコが限界でしょうか。

テスト前日に部屋の中を掃除したりする、現実逃避みたいなもので
すよね。

現実逃避で有ろうと無かろうと、お客様には丁寧に接客するのが1
番です。

「いらっしやいませ、大変混み合っていますので、しばしお待ちくだ
さいね。」

只今の時刻、12:30。

10:00に開店してから、昼時では今が1番混み合うのでこの時
間帯に入ってきたお客様には少し待って貰います。

わたしとしては、すつごく申し訳ない気持ちでいっぱいになるので
すが、これ以上お店を大きくするのは無理なのでこうして待ってもら

うように呼びかけるしかありません。

「ごちそうさん、また来るよ。」

そう言った声が聞こえたので、お会計を済ませたお客様がお店を後にしたようですね。

ありがとうございます。と言いなから頭を下げて見送り、先ほど待っていたいただいたお客様を案内します。

全個室制のお店なので、席の数は限られています。

「ごちらへどうぞ。」

……

現在の時刻は14:00ちょっと過ぎたあたりですね。

お客様の流れが止まったあたりなので、そろそろわたしも勉強に戻らなくては……と思ったのですが、どうやら2人ほどご来店されたようです。

勉強に戻りたいのもありますが、それよりも今来たお客様に満足してもらいたいので、少しだけがまんです。

さつき見た感じ、厨房の方も立てこんでいて手が離せないようでしたし、ここはわたしがかするしかありません！

「いらっしやいませ、お席に案内してもよろしいでしょうか？」

わたしよりも年上の方達ようですね……っとハッ!!

……カッパルのお客様のようですね。

初々しきみたいなのが出てる気がします。

「ああ、お願いするよ。」

男性の方からそう言われたので案内することにしました。

部屋に案内する途中で、後ろの方から話し声が聞こえてきました。

といっても、断片的な単語くらいしか聞き取れませんでしたかね、何でしょう『かい』がどうか『このお店だと思』だとか、わたしにはよくわかりませんでしたけど……。

そうしている間に、お部屋に着いたのでそこに案内します。

わたしの家でもあって、和食料理店でもある鳳玉亭は、和風の料理もですけど、内装にもこだわっています。

ちよつと自慢みたいになって恥ずかしいんですけど、わたしの家が

こんなに大きいにもお客様がそれぞれ個室でくつろいでもらうためでもあります。

他の和食店とは少し毛色が違いますが、それによって来るお客様も増えているので、わたし自身、気に入っています。

このカッパルさんもきつとこの和の雰囲気に着かれて来たのでしょうか？

「お冷やをお出しするので、少々お待ちくださいませ。」

そう言つて、一旦このお部屋を後にします。

外にいたはずなので、お冷やをお出しして涼んでももらわないとですぬ。

少し急いで廊下を歩きます。

厨房に入り、素早く冷たい麦茶の入った容器と、二人分のガラスのコップを持っていきます。

ガラスのコップを使うと和の雰囲気にとぐわなくなりそうでしたが、おとうさんが和風の造りのものを選んでくれたので、違和感はなくなりました。

ガラスのコップは透き通っていて、見た目、涼しげなので、今の季節によく合います。

わたしがおねだりして、おとうさんに買ってきて貰ったのは正解でしたぬ。

それでは、そろそろメニューをお尋ねしましょうか。

「ちよつと良いかしら、聞きたいことがあるのだけれど。」

声をかけようとしたまさにその時でした。

女性の方がわたしよりも先にそう尋ねてきました。

……聞きたいことですか。

何でしょう、メニューのことについてですかね……？

「はい、何でしょうか、お客様？」

その方は、紫の長い髪をかきあげながら尋ねてきました。

「あなた、怪異という物を知っているかしら？」